

# 一握の砂

石川啄木

青空文庫



函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相<sup>ちか</sup>邇<sup>か</sup>きをたづねて仮にわかてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の紀念なり。

# 我を愛する歌

東<sup>とう</sup>海<sup>かい</sup>の 小<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>の 磯<sup>いそ</sup>の 白<sup>しろ</sup>砂<sup>すな</sup>に

われ泣<sup>な</sup>きぬれて

蟹<sup>かに</sup>とたはむる

頬<sup>ほ</sup>につたふ

なみだのごはず

一<sup>いち</sup>握<sup>あく</sup>の 砂<sup>すな</sup>を 示<sup>しめ</sup>しし 人<sup>ひと</sup>を 忘れず

大<sup>だい</sup>海<sup>かい</sup>に むかひて 一<sup>ひとり</sup>人<sup>ひと</sup>

七<sup>なな</sup>八<sup>やう</sup>日<sup>か</sup>

泣<sup>な</sup>きなむとすと 家<sup>い</sup>を出<sup>い</sup>でにき

いたく鑄<sup>さ</sup>びしピストル出<sup>い</sup>でぬ  
砂<sup>すな</sup>山<sup>やま</sup>の  
砂を指<sup>さ</sup>もて掘<sup>ほ</sup>りてありしに

ひと夜<sup>よ</sup>さに嵐<sup>あらし</sup>来<sup>きた</sup>りて築<sup>きづ</sup>きたる  
この砂山<sup>すなやま</sup>は  
何<sup>なに</sup>の墓<sup>はか</sup>そも

砂山<sup>すなやま</sup>の砂<sup>すな</sup>に腹<sup>はら</sup>這<sup>は</sup>ひ  
初恋<sup>はつこひ</sup>の

いたみを遠<sup>とほ</sup>くおもひ出<sup>い</sup>づる日

砂山<sup>すなやま</sup>の裾<sup>すそ</sup>によこたはる流<sup>りゅう</sup>木<sup>ぼく</sup>に  
あたり見<sup>み</sup>まはし  
物<sup>もの</sup>言<sup>い</sup>ひてみる

いのちなき砂のかなしきよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

しつとりと

なみだを吸へる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

大という字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来れり

目さまして猶起き出でぬ児の癖は

かなしき癖ぞ

母よ咎むな

ひと塊くれの土よだれに涎よだれし  
泣く母の肖にかほ顔にかほつくりぬ  
かなしくもあるか

燈影ほかげなき室しつに我あり

父と母

壁かべのなかより杖つゑつきて出いづ

たはむれに母を背せ負おひて  
そのあまり軽かろきに泣なきて  
三歩あゆまず

飄へうぜん然ぜんと家いを出いでては

飄然と帰りし癖よ

友はわらへど

ふるさとの父の咳せきする度たびに斯かく

咳いの出いづるや

病やめばはかなし

わが泣なくを少女等をとめらきかば

病やまいぬ犬いぬの

月に吠ほゆるに似にたりといいふらむ

何いづく処ところやらむかすかに虫むしのなくなくごとごとき

こころ細ほそさを

今けふ日ふもおぼゆる

いと暗き

穴あなに心こゝろを吸すはれゆくごとく思ひて  
つかれて眠る

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕し遂とげて死なむと思ふ

こみ合あへる電車の隅すみに

ちぢこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

浅草あさくさの夜よのにぎはひに

まぎれ入り

まぎれ出いで来きしさびしき心

愛<sup>あいけん</sup>犬の耳<sup>き</sup>斬りてみぬ

あはれこれも

物に倦<sup>う</sup>みたる心にかあらむ

鏡<sup>かがみ</sup>とり

能<sup>あた</sup>ふかぎりのさまさまの顔<sup>かほ</sup>をしてみぬ

泣<sup>な</sup>き飽<sup>あ</sup>きし時

なみだなみだ

不思議なるかな

それをもて洗<sup>あら</sup>へば心<sup>こころ</sup>戯<sup>あそ</sup>けたくなれり

呆<sup>あき</sup>れたる母の言葉に

気がつけば

茶碗ちやわんを箸はしもて敲たたきてありき

草くさに臥ねて

おもふことなし

わが額ぬかに糞ふんして鳥は空に遊べり

わが髭ひげの

下向くせく癖くせがいきどほろし

このごろ憎にくき男おとこに似たれば

森の奥おくより銃じゅう声せい聞きゆ

あはれあはれ

自みづから死しぬる音ねのよろしさ

大木たいぼくの幹みきに耳みみあて

こはんちち  
小半日

堅かたき皮をばむしりてありき

「さばかりの事に死ぬるや」

「さばかりの事に生くるや」

止よせ止せ問答

まれにある

この平たひらなる心には

時計の鳴るもおもしろく聴きく

ふと深き怖れを覚え

ぢつとして

やがて静かに臍ほそをまさぐる

高<sup>たか</sup>山<sup>やま</sup>のいただきに登り  
な<sup>な</sup>にがなしに帽<sup>ぼうし</sup>子をふりて  
下<sup>くだ</sup>り来<sup>き</sup>しかな

何<sup>ど</sup>処<sup>こ</sup>やらに沢<sup>たく</sup>山<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>があらそひて  
鬮<sup>くじひ</sup>引<sup>ひ</sup>くごとし  
われも引きたし

怒<sup>いか</sup>る時

かならずひとつ鉢<sup>はち</sup>を割<sup>わ</sup>り  
九<sup>く</sup>百<sup>ひゃく</sup>九<sup>く</sup>十九<sup>じゅう</sup> 割<sup>わ</sup>りて死<sup>し</sup>なまし

いつも逢<sup>あ</sup>ふ電車<sup>でんしゃ</sup>の中<sup>なか</sup>の小<sup>こ</sup>男<sup>をとこ</sup>の  
稜<sup>かど</sup>ある眼<sup>まなこ</sup>

このごろ気になる

鏡<sup>かがみや</sup>屋の前に来て

ふと驚きぬ

見すぼらしげに歩<sup>あゆ</sup>むものかも

何<sup>なに</sup>となく汽車に乗りたく思ひしのみ

汽車<sup>お</sup>を下りしに

ゆくところなし

空家<sup>あきや</sup>に入り

煙草<sup>たばこ</sup>のみたることありき

あはれただ一人居<sup>い</sup>たきばかりに

何<sup>なに</sup>がなしに

さびしくなれば出<sup>で</sup>てあるく男となりて

みつき  
三月にもなれり

やはらかに積れる雪に  
ほほ 熱てる頬を埋むるごとき  
恋してみたし

かなしきは  
あ 飽くなき利己の一念を  
持てあましたる男にありけり

手も足も  
へや 室いっばいに投げ出して  
やがて静かに起きかへるかな

ももとせ  
百年の長き眠りの覚めしごと

あぐび  
呻してまし

思ふことなしに

うでく  
腕拱みて

このごろ思ふ

おほ  
大いなる敵目てきの前に躍をどり出いでよと

手が白く

か  
且だいつ大なりき

ひぼん  
非凡なる人といはるる男に会ひしに

こころよく

人を讚ほめてみたくなり  
にけり

りこ  
利己の心に倦うめるさびしさ

雨降れば

わが家いへの人誰たれも誰も沈める顔す  
雨霽はれよかし

高きより飛びおりるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

この日頃

ひそかに胸にやどりたる悔くあり

われを笑はしめざり

へつらひを聞けば

腹立はらだつわがこころ

あまりに我を知るがかなしき

知らぬ家<sup>いへ</sup>たたき起して  
 遁<sup>に</sup>げ来る<sup>く</sup>がおもしろかりし  
 昔の恋しさ

非凡<sup>ひぼん</sup>なる人のごとくにふるまへる  
 後<sup>のち</sup>のさびしさは  
 何<sup>なに</sup>にかたぐへむ

大<sup>おほ</sup>いなる彼の<sup>からだ</sup>身体が  
 憎<sup>にく</sup>かりき

その前にゆきて物を言ふ時

実務には役に立たざるうた<sup>ひと</sup>人と  
 我を見る人に

金借りにけり

遠くより笛の音ねきこゆ

うなだれてある故ゆゑやらむ

なみだ流るる

それもよしこれもよしとてある人の

その気がるさを

欲ほしくなりたり

死ぬことを

持ちやく薬をのむがごとくにも我はおもへり

心いためば

路みちばた傍に犬ながながと 呻あくびしぬ

われも真ま似ねしぬ  
うらやましきに

真劍まけんになりて竹もて犬を撃うつ  
小児せうにの顔を  
よしと思へり

ダイナモの

重うなき唸りのここちよさよ

あはれこのごとく物を言はまし

剽へうきん軽さがの性なりし友の死顔の

青き疲れが

いまも目にあり

気の変る人に仕<sup>つか</sup>へて

つくづく

わが世がいやになり<sup>に</sup>けるかな

り<sup>よ</sup>う

龍のごとくむなしき空に躍<sup>をど</sup>り出<sup>い</sup>でて

消えゆく煙

見れば飽<sup>あ</sup>かなく

こころよき疲れなるかな

息もつかず

仕事をしたる後<sup>のち</sup>のこの疲れ

空<sup>そら</sup>寝<sup>ね</sup>入<sup>い</sup>生<sup>り</sup> <sup>なまあくび</sup> 呻<sup>うめ</sup>など

なぜするや

思ふこと人にさとらせぬため

箸<sup>はしと</sup>止めてふつと思ひぬ

やうやくに

世のならばしに慣れにけるかな

朝はやく

婚<sup>こんぎ</sup>期を過ぎし妹の

恋<sup>こひぶみ</sup>文めける文<sup>ふみ</sup>を読<sup>よ</sup>めりけり

しつとりと

水を吸<sup>す</sup>ひたる海<sup>かい</sup>綿<sup>めん</sup>の

重<sup>おも</sup>さに似<sup>に</sup>たる心<sup>こころ</sup>地<sup>ち</sup>おほゆる

死<sup>し</sup>ね死<sup>し</sup>ねと己<sup>おのれ</sup>を怒<sup>いか</sup>り

もだしたる

心の底の暗きむなしさ

けものめく顔あり口をあけたてす  
とのみ見てゐぬ

人の語るを

親と子と

はなればなれの心もて静かに対<sup>むか</sup>ふ  
気まづきや何<sup>な</sup>ぞ

かの船の

かの航海の船<sup>せん</sup>客<sup>かく</sup>の一人にてありき  
死にかねたるは

目の前の菓子<sup>くわし</sup>皿<sup>ざら</sup>などを

かりかりと嘯<sup>か</sup>みてみたくなりぬ  
もどかしきかな

よく笑ふ若き男の

死にたらば

すこしはこの世さびしくもなれ

何がなしに

息<sup>いき</sup>きれるまで 駆<sup>か</sup>け出<sup>だ</sup>してみたくなりたり  
草<sup>くさ</sup>原<sup>はら</sup>などを

あたらしき背広など着て

旅をせむ

しかく今年<sup>ことし</sup>も思ひ過ぎたる

ことさらに燈火ともしびを消して  
まちまちと思ひてゐしは  
わけもなきこと

浅草の 凌雲閣りょううんかくのいただきに  
腕組みし日の  
長き日記にきかな

尋常じんじやうのおどけならむや  
ナイフ持ち死ぬまねをする  
その顔その顔

こそこその話がやがて高くなり  
ピストル鳴りて  
人生終る

時ありて

子供のやうにたはむれす  
恋ある人のなさぬ業わざかな

とかくして家を出いづれば

日光のあたたかさあり

息ふかく吸ふ

つかれたる牛のよだれは

たらたらと

千万年も尽きざるごとし

路みち傍ばたの切きり石いしの上に

腕うで拱かみて

空を見上ぐる男ありたり

何やらむ

おだや  
穏かならぬ目付して

つるはし  
鶴嘴を打つ群を見てゐる

けふ  
心より今日は逃げ去れり

やまひ けもの  
病ある獣のごとき

不平逃げ去れり

おほどかの心来れり

あるくにも

腹に力のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしきに

来て寝たる

宿屋やとやの夜具やぐのこころよさかな

友よさは

乞食こじきの卑いやしき厭いとふなかれ  
 餓うゑたる時は我わかも爾しかりき

新あたらしきインクいんくののにほひ

栓せん拔ぬけば

餓うゑたる腹はらに沁しみむがかなしも

かなしきは

喉のどのかわきをこらへつつ  
 夜寒よさむの夜具やぐにちぢこまる時

一度でも我に頭を下げさせし  
人みな死ねと  
いのりてしこと

我に似し友の二人よふたり  
一人は死に  
一人は牢ろうを出いでて今病やむ

あまりある才いを抱いだきて  
妻のため

おもひわづらふ友をかなしむ

打明けて語りて  
何か損そんをせしごとく思ひて  
友とわかれぬ

どんよりと

くもれる空を見てゐしに

人を殺したくなりけるかな

ひとなみ  
人並の才に過ぎざる

わが友の

深き不平もあはれなるかな

たれ  
誰が見てもとりどころなき男来て

みば  
威張りて帰りぬ

かなしくもあるか

はたらけど

はたらけど猶なほわが生活くらし樂にならざり

ぢつと手を見る

何もかも行末ゆくすゑの事みゆるごとき

このかなしみは

拭ぬぐひあへずも

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく

今日けふわれ切せちに金かねを欲ほりせり

水すゐ晶しやうの玉をよろこびもてあそぶ

わがこの心

何なにの心ぞ

事もなく

且つ<sup>か</sup>こころよく肥<sup>こ</sup>えてゆく  
わがこのごろの物足らぬかな

大いなる水晶の玉を

ひとつ欲<sup>ほ</sup>し

それにむかひて物を思はむ

うぬ惚<sup>ぼ</sup>るる友に

合<sup>あひづち</sup>槌うちてゐぬ

施<sup>ほどこし</sup>与<sup>よ</sup>をするごとき心に

ある朝のかなしき夢のさめぎはに

鼻<sup>い</sup>に入り来<sup>き</sup>し

味<sup>みそ</sup>噌<sup>に</sup>を煮<sup>か</sup>る香<sup>か</sup>よ

こつこつと空地あきちに石をぎざむ音  
耳きにつき来ぬ  
家いへに入るまで

何ながなしに  
頭あたまのなかに崖がけありて  
日毎ひごとに土のくづるるごとし

遠方ゑんぱうに電話の鈴りんの鳴るごとく  
今日けふも耳鳴る  
かなしき日かな

垢あかじみし袷あはせの襟えりよ  
かなしくも  
ふるさとの胡桃くるみや焼くるにほひす

死にたくてならぬ時あり  
はばかりに人目を避<sup>さ</sup>けて  
怖<sup>こは</sup>き顔する

一隊の兵を見送りて

かなしかり

何<sup>なに</sup>ぞ彼等のうれひ無<sup>な</sup>げなる

邦<sup>くにびと</sup>人の顔たへがたく卑<sup>いや</sup>しげに

目にうつる日なり

家にこもらむ

この次の休<sup>やすみ</sup>日に一日寝てみむと  
思ひすぎしぬ

みとせ  
三年このかた

或る時のわれのこころを

焼きたての

ば  
麺麭に似たりと思ひけるかな

たんたらたらたんたらたらと

あまだれ  
雨滴が

痛むあたまにひびくかなしさ

ある日のこと

へや  
室の障子をはりかへぬ

その日はそれにて心なごみき

かうしては居られずと思ひ

立ちにしが  
 おもて 戸外に馬の嘶いななきしまで

気ぬけして廊下らうかに立ちぬ  
 あらかに扉ドアを推おせしに  
 すぐ開あきしかば

ちつとして

黒はた赤のインク吸ひ  
 堅くかわける海綿かいめんを見る

誰たれが見ても

われをなつかしくなるごとき  
 長き手紙を書きたき夕ゆふへ

うすみどり

飲めば身体からだが水のごと透すきとほるてふ  
薬はなきか

いつも睨にらむランプに飽あきて

三日みかばかり

蠟燭ろうそくの火にしたしめるかな

人間のつかはぬ言葉

ひよつとして

われのみ知れるごとく思しふ日

あたらしき心もとめて

名も知らぬ

街など今日けふもさまよひて来きぬ

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

花を買ひ来て

妻としたしむ

何すれば

此処に我ありや

時にかく打驚きて室を眺むる

人ありて電車のなかに唾を吐く

それにも

心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす場所が欲し  
家をおもへば

こころ冷<sup>つめ</sup>たし

人みなが家<sup>いへ</sup>を持つてふかなしみよ

墓<sup>い</sup>に入ることく

かへりて眠る

何かひとつ不思議を示し

人みなのおどろくひまに

消えむと思ふ

人といふ人のこころに

一人づつ囚<sup>しゅうじん</sup>人がゐて

うめくかなしさ

叱<sup>しか</sup>られて

わつと泣き出す子供心

その心にもなりてみたきかな

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ

心はかなし

かくれ家もなし

放たれし女のごときかなしみを

よわき男の

感ずる日なり

庭石に

はたと時計をなげうてる

昔のわれの怒りいとしも

顔あかめ怒りしことが

あくる日は

さほどにもなきをさびしがるかな

いらだてる心よ汝はかなしかり

いざいざ

すこし 呻などせむ

女あり

わがいひつけに背かじと心を砕く

見ればかなしも

ふがひなき

わが日の本の女等を

秋雨の夜にのしりしかな

男とうまれ男と交りまじ

負けてをり

かるがゆゑにや秋が身に沁しむ

わが抱いだく思想はすべて

金かねなきに因いんすることし

秋の風吹く

くだらない小説を書きてよろこべる

男おとこ憐あはれなり

初はつ秋あきの風

秋の風

今日けふよりは彼かのふやけたる男に

口を利かじと思ふ

はても見えぬ

真直ますぐの街をあゆむごとき

こころを今日は持ちえたるかな

何事も思ふことなく

いそがしく

暮らせし一日ひとひを忘れじと思ふ

何事も金かねとわらひ

すこし経へて

またも俄にはかに不平つくのり来

誰たぞ我われに

ピストルにても撃<sup>う</sup>てよかし  
 伊藤のごとく死にて見せなむ

やとばかり  
 桂<sup>かづら</sup>首相に手とられし夢みて覚<sup>さ</sup>めぬ  
 秋の夜の二時

## 煙

一

病<sup>やまひ</sup>のごと  
 思<sup>しぎやう</sup>郷のこころ湧<sup>わ</sup>く日なり  
 目にあをぞらの煙<sup>けむり</sup>かなしも

己おのが名をほのかに呼びて

涙せし

十四じふしの春にかへる術すべなし

青空に消えゆく煙

さびしくも消えゆく煙

われにし似るか

かの旅の汽車の車しやしやう掌やうが

ゆくりなくも

我が中学の友なりしかな

ほとばしる唧筒ポンプの水の

心地こころよさよ

しばしは若きころもて見る

師も友も知らで責めにき  
謎なぞに似る

わが学業のおこたりの因もと

教室の窓より遁にげて

ただ一人

かの城しろ址あとに寝に行きしかな

不こず来かた方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

十五じふごの心

かなしみといはばいふべき

物の味あぢ

我の嘗めしはあまりに早かり

晴れし空仰げばいつも

口笛を吹きたくなりて

吹きてあそびき

夜寝ても口笛吹きぬ

口笛は

十五の我の歌にしありけり

よく叱る師ありき

髯の似たるより山羊と名づけて

口真似もしき

われと共に

小鳥に石を投げて遊ぶ

後備大尉の子もありしかな

城址しろあとの

石に腰掛けこしか

禁制の木の実をひとり味あぢはひしこと

その後のちに我を捨てし友も

あの頃は共に書ふみよ読み

ともに遊びき

学校の図書庫としよぐらの裏の秋の草

黄きなる花咲きし

今も名知らず

花散れば

先づ人さきに白の服着て家出づる  
我にてありしか

今は亡き姉の恋人のおとうとと

なかよくせしを

かなしと思ふ

夏休み果ててそのまま

かへり来ぬ

若き英語の教師もありき

ストライキ思ひ出でて

今は早や吾が血躍らず

ひそかに淋し

もりをか  
盛岡の中学校の  
露バルコン台の  
欄干てすりに最もい一度我を倚よらしめ

神有りと言ひ張る友を

説ときふせし

かみちの路ぼた傍くりの栗きの樹もとの下

西風に

うちまるおほち  
内丸大路の桜の葉

かさこそ散るを踏ふみてあそびき

おほかた  
そのかみの愛読しよの書しよよ  
大方は

今は流行はやらずなりにけるかな

石ひとつ

坂をくだるがごとくにも

我けふの日に到り着きたる

愁うれひある少年せうねんの眼うらやに羨うらやみき

小鳥の飛ぶを

飛びてうたふを

解剖ふわけせし

蚯蚓みみずのいのちもかなしかり

かの校庭もくさくの木柵もとの下

かぎりなき知識よくの慾よくに燃ゆる眼を

姉は傷みき

人恋ふるかと

蘇峯そほうの書しよを我すに薦すすめし友早く  
校かうを退しりぞきぬ

まづしさのため

おどけたる手つきをかしと

我のみはいつも笑ひき

博学の師を

自しが才さいに身をあやまちし人のこと

かたりきかせし

師もありしかな

そのかみの学校一のなまけ者

今は真面目まじめに

はたらきて居をり

田舎あなめく旅の姿を

三日みかばかり都みやこに曝さらし

かへる友かな

茨島ばらしまの松の並木の街道を

われと行きし少女をとめ

才さいをたのみき

眼を病みて黒き眼鏡めがねをかけし頃

その頃よ

一人泣くをおぼえし

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす

友みな己おのが道をあゆめり

先さきんじて恋のあまさと

かなしさを知りし我なり

先おんじて老ゆ

興きよきた来れば

友なみだ垂たれ手を揮ふりて

酔ゑひどれ漢のごとくなりて語りき

人ごみの中をわけ来くる

わが友の

むかしながらの太き杖かなふとつゑ

見よげなる年賀の文を書く人とふみ

おもひ過ぎにき

三年ばかりはみとせ

夢さめてふつと悲しむ

わが眠り

昔のごとく安からぬかな

そのむかし秀才の名の高かりししうさい

友牢にありちゆう

秋のかぜ吹く

近眼にてちかめ

おどけし歌をよみ出<sup>い</sup>でし  
 茂雄<sup>しげを</sup>の恋もかなしかりしか

わが妻のむかしの願ひ  
 音楽のことにかかりき  
 今はうたはず

友はみな或日<sup>あるひしはう</sup>四方に散り行きぬ  
 その後八年<sup>のちやとせ</sup>  
 名<sup>な</sup>挙<sup>あ</sup>げしもなし

わが恋を  
 はじめて友にうち明けし夜<sup>よる</sup>のことなど  
 思<sup>い</sup>ひ出<sup>い</sup>づる日

糸切れし紙鳶たこのごとくに  
若き日の心かろくも  
とびさりしかな

二

ふるさとの訛なまりなつかし  
停車場ていしやばの人ごみの中に  
そを聴ききにゆく

やまひある獣けもののごとき  
わがこころ

ふるさとのこと聞けばおとなし

ふと思ふ

ふるさとにゐて日毎聴ひごとききし雀すずめの鳴くを  
 三年聴みとせかざり

亡なくなれる師がその昔

たまひたる

地理の本など取りいでて見る

その昔

小学校の柁屋根まさやねに我が投げし鞆まり  
 いかにかなりけむ

ふるさとの

かの路傍みちばたのすて石よ

今年も草うづに埋うづもれしらむ

わかれをれば妹いとしも

赤き緒をの

下駄げなど欲ほしとわめく子なりし

ふつか  
二日前ふに山の絵見ゑしが

けさ  
今朝けになりて

にはかに恋しふるさとの山

あめうり  
飴あめ売うりのチャルメラ聴きけば

うしなひし

をさなき心ひろへるごとし

このごろは

母も時と時ときふるさとのことを言いひ出いづ

秋あきに入いれるなり

それとなく

郷里くにのことなど語り出いでて

秋よの夜に焼く餅もちのほひかな

かにかくに澁民村しぶたみむらは恋しかり

おもひでの山

おもひでの川

田はたも畑はたも売りて酒のみ

ほろびゆくふるさと人ひとに

心寄する日

あはれかの我の教へし

子等こらもまた

やがてふるさとを棄<sup>す</sup>てて出<sup>い</sup>づるらむ

ふるさとを出<sup>い</sup>で来<sup>き</sup>し子等の

相<sup>あ</sup>会<sup>い</sup>ひて

よろこぶにまさるかなしみはなし

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出<sup>い</sup>でしかなしみ

消ゆる時なし

やはらかに柳あをめる

北<sup>きた</sup>上<sup>かみ</sup>の岸<sup>きし</sup>辺<sup>へ</sup>目に見ゆ

泣けとごとくに

ふるさとの

村医そんいの妻のつつましきくしまき櫛くし巻まきなども  
なつかしきかな

かの村の登記所とうきしよに来て  
肺病はいやみて

間もなく死にし男もありき

小学の首席を我あらせと争あひし

友のいとなむ

木賃宿きちんやどかな

千代治等ちよぢら ちやうも長ちやうじて恋し

子を挙げあぬ

わが旅にしてなせしごとくに

ある年の盆ほんの祭に

衣貸きぬかさむ踊れと言ひし

女を思ふ

うすのろの兄と

不具かたはの父もてる三太さんたはかなし

夜よるも書読ふみよむ

我と共に

栗毛くりげの仔馬こうま走らせし

母の無き子の盗ぬすみぐせ癖せかな

大形おほがたの被布ひふの模様ひらの赤き花

今も目に見ゆ

六歳むつの日の恋

その名さへ忘れし頃

飄然へうぜんとふるさとに来て

咳せきせし男

意地悪いぢわるの大工だいくの子などもかなしかり

戦いくさに出いでしが

生きてかへらず

肺を病む

極道地主ごくだうちぬしの総領そうりやうの

よめとりの日の春の雷らいかな

宗次郎そうじろに

おかねが泣きて口説くどき居をり

大根だいこんの花白きゆふぐれ

小せうしん心の役場の書記の  
気ふの狂うはされし樽うはさに立てる  
ふるさとの秋

わが従兄いとこ

野山かりの獵あに飽のちきし後  
酒いへのみ家や売り病にみて死しにしかな

我ゆきて手をとれば

泣なきてしづまりき  
酔あひて荒あれしそのかみの友

酒のめば

かたな  
 刀をぬきて妻を逐おふ教師けうしもありき  
 村を逐おはれき

年ごとに 肺はいびやう 病びやう やみの殖ふえてゆく

村に迎へし

若き医者かな

ほたる狩がり

川にゆかむといふ我を

やまち  
 山路にさそふ人にてありき

ばれいしよ  
 馬鈴薯ばれいしよのうす紫の花に降ふる

雨を思へり

みやこ  
 都の雨に

あはれ我がノスタルジヤは  
金きんのごと

心に照れり清くしみらに

友として遊ぶものなき

性しやうわる悪わるの巡査こらの子等らも

あはれなりけり

閑古鳥かんこどり

鳴く日となれば起おこるてふ

友のやまひのいかになりけむ

わが思ふこと

おほかたは正ただしかり

ふるさとのたより着つける朝あしたは

今日聞けば

かの幸さちうすきやもめ人びと

きたなき恋に身いを入るるてふ

わがために

なやめる魂たまをしづめよと

讚美歌うたふ人ありしかな

あはれかの男のごときたましひよ

今は何処いづこに

何を思ふや

わが庭の白き躑躅つづじを

薄うすづき月の夜よに

折<sup>を</sup>りゆきしことな忘れそ

わが村に

初めてイエス・クリストの道を説<sup>と</sup>きたる

若き女かな

霧ふかき好<sup>かう</sup>摩<sup>ま</sup>の原<sup>はら</sup>の

停車場の

朝の虫こそすずろなりけれ

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え来<sup>く</sup>れば  
襟<sup>えり</sup>を正<sup>ただ</sup>すも

ふるさとの土をわが踏めば

何がなしに足かろ軽くなり  
心おも重れり

ふるさどに入りて先まづ心いた傷むかな  
道広くなり  
橋もあたらし

見もしらぬ女をんな教師が  
そのかみの  
わが学まなび舎の窓に立てるかな

かの家いへのかの窓にこそ  
春の夜よを  
秀子ひでことともに蛙かはづ聴きけれ

そのかみの神童しんどうの名の

かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

ふるさとの停車場路ていしやばみちの

川ばたの

胡桃くるみの下に小石拾ひろへり

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

秋風のこころよさに

ふるさとの空遠とほみかも

高き屋たかやにひとりのぼりて  
愁うれひて下くだる

皎かうとして玉をあざむく小せうじん人も  
秋来あきくといふに  
物を思へり

かなしきは

秋風ぞかし

稀まれにのみ湧わきし涙なみだの繁しじに流るる

青あおに透すく

かなしみの玉たまに枕まくらして

松まつのひびきを夜よもすがら聴きく

神<sup>さ</sup>寂<sup>さ</sup>びし七<sup>なな</sup>山<sup>やま</sup>の杉

火のごとく染めて日<sup>い</sup>入りぬ

静かなるかな

そを読めば

愁<sup>うれ</sup>ひ知るといふ書<sup>ふ</sup>焚<sup>みた</sup>ける

いにしへ人<sup>びと</sup>の心よろしも

ものなべてうらはかなげに

暮れゆきぬ

とりあつめたる悲しみの日は

みづたまり  
水 潦

暮れゆく空とくれなるの紐<sup>ひも</sup>を浮べぬ

あきさめ  
秋雨の後

秋立つは水にかも似る

洗はれてあら

思ひことごと新しくなる

愁ひ来てうれ

丘にのぼれば

名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の実ついはば ばらみ

秋の辻つじ

よ四すぢの路みちの三すぢへと吹きゆく風の

あと見えずかも

秋の声まづいち早く耳に入る

かかる性さが持つ

かなしむべかり

目になれし山にはあれど

秋来れば

神や住まむとかしこみて見る

わが為さむこと世に尽きて

長き日を

かくしもあはれ物を思ふか

さらさらと雨落ち来り

庭の面の濡れゆくを見て

涙わすれぬ

ふるさとの寺の御廊に

踏み<sup>ふ</sup>にける

小櫛<sup>をくし</sup>の蝶<sup>てふ</sup>を夢にみしかな

ころみに

いとけなき日の我となり

物言ひてみむ人あれと思ふ

はたはたと黍<sup>きび</sup>の葉鳴れる

ふるさとの軒<sup>のきば</sup>端なつかし

秋風吹けば

摩<sup>す</sup>れあへる肩のひまより

はつかにも見きといふさへ

日記<sup>にき</sup>に残れり

風流男みやびをは今も昔も

泡雪あわゆきの

玉手たまでさし捲まく夜よにし老おゆらし

かりそめに忘れても見まし

石だたみ

春生おふる草うもに埋うもるるがごと

その昔ゆりかご揺ゆり籃かごに寝ねて

あまたたび夢ゆめにみし人か

切せちになつかし

神無月かみなづき

岩手いはての山やまの

初雪はつゆきの眉まゆにせまりし朝あさを思おもひぬ

ひでり雨さらさら落ちて

前栽せんざいの

萩はぎのすこしく乱みだれたるかな

秋の空廓くわくれう寥れうとして影もなし

あまりにさびし

烏からすなど飛べ

雨後うごの月

ほどよく濡ぬれし屋根瓦やねがはらの

そのところどころ光るかなしさ

われ饑うゑてある日に

細き尾を掉ふりて

饑ゑて我を見る犬の面つらよし

いつしかに

泣くといふこと忘れたる

我泣かしむる人のあらしか

汪わうぜん然として

ああ酒のかなしみぞ我きたに来れる

立ちて舞まひなむ

いとどな  
鳴く

そのかたはらの石きよに踞し

泣き笑ひしてひとり物言ふ

力なく病やみし頃ころより

口すこし開あきて眠ねむるが  
癖くせとなりにき

人ひとり得うるに過うぎぎざる事ことをもて

大たいくわん願がんとせし

若わかきあやまち

物怨ぶつをんずる

そのやはらかき上目うはめをば

愛めづとことさらつれなくせむや

かくばかり熱あつき涙なみだは

初恋初恋の日ひにもありきと

泣なく日ひまたなし

長く長く忘れし友に

会ふごとき

よろこびをもて水の音聴きく

秋の夜の

鋼鉄はがねの色の大空に

火を噴はく山もあれなど思ふ

岩手山いはてやま

秋はふもとの三方さんぽうの

野に満みつる虫を何なにと聴くらむ

父のごと秋はいかめし

母のごと秋はなつかし

家持いへたぬ児こに

秋来れば

恋ふる心のいとまなさよ

夜もい寝がてに雁多く聴く

長月も半ばになりぬ

いつまでか

かくも幼く打出でずあらむ

思ふてふこと言はぬ人の

おくり来し

忘れな草もいちじろかりし

秋の雨に逆反りやすき弓のごと

このころ

君のしたしまぬかな

松の風よひる夜よ昼ひるひびきぬ

人と訪とはぬ山の祠ほこらの

石いし馬うまの耳みみに

ほのかなる朽木くちぎの香かり

そがなかの蕈たけの香かりに

秋やや深し

時し雨ぐれ降ふるることき音ねして

木こ伝づたひぬ

人ひとによく似にし森もりの猿さるども

森の奥

遠きひびきす

木のうろに白うすひく 侏儒しゆじゆの国にかも来きし

世のはじめ

まづ森ありて

半はん神しんの人そが中に火や守りけむ

はてもなく砂うちつづく

戈壁ゴビの野に住みたまふ神は

秋の神かも

あめつちに

わが悲しみと 月げつ光わうと

あまねき秋の夜よとなれりけり

うらがなしき

夜の物の音洩れ来るを  
拾ふがごとくさまよひ行きぬ

旅の子の

ふるさとに来て眠るがに  
げに静かにも冬の来しかな

## 忘れがたき人人

一

潮かをる北の浜辺の  
砂山のかの浜薔薇よ  
今年も咲けるや

たのみつる年の若さを数<sup>かぞ</sup>へみて

指を見つめて

旅がいやになりき

みた<sup>みた</sup>び  
三度ほど

汽車の窓よりながめたる町の名なども

したしかりけり

は<sup>は</sup>こ<sup>こ</sup>だ<sup>だ</sup>て  
函館<sup>はこ</sup>の床屋<sup>とこ</sup>の弟子<sup>でし</sup>を

おもひ出<sup>い</sup>でぬ

耳<sup>そ</sup>剃<sup>そ</sup>らせるがこころよかりし

わがあとを追<sup>き</sup>ひ来て

知れる人もなき

辺土へんどに住みし母と妻かな

船ふねに酔よひてやさしくなれる

いもうとの眼め見ゆ

津つ軽がるの海を思へば

目を閉とぢて

傷しやうしん 心の句を誦ずしてゐし

友の手紙のおどけ悲しも

をさなき時

橋はしの欄干らんかんに糞塗くそぬりし

話も友はかなしみてしき

おそらくは生しやうがい 涯がい妻をむかへじと

わらひし友よ  
今もめとらず

あはれかの  
眼鏡めがねの縁ふちをさびしげに光らせてゐし  
女教師よ

友われに飯めしを与へき  
その友に背そむきし我の  
性さがのかなしさ

函館はこだての青柳町あをやぎちやうこそかなしけれ  
友の恋こひうた歌  
矢ぐるまの花

ふるさとの

麦のかをりを懐かしむ

女の眉にこころひかれき

あたらしき洋書の紙の

香をかぎて

一途に金を欲しと思ひしが

しらなみの寄せて騒げる

函館の大森浜に

思ひしことども

朝な朝な

支那の俗歌をうたひ出づる

まくら時計を愛でしかなしみ

へうはく  
 漂泊の愁うれひを叙じよして成ならざりし  
 草稿さうかうの字の  
 読みがたさかな

いくたびか死なむとしては

死なざりし

わが来こしかたのをかしく悲し

函館ぐわぎょうの臥牛やまの山はんぶくの半腹の

碑ひの漢詩からうたも

なかば忘れぬ

むやむやと

口くちの中ちにてたふとげの事つふやを呟やく

乞食こじきもありき

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく

山いに入りいにき

神のごとき友

巻煙草まきたばこ口くちにくはへて

浪なみあらき

磯いその夜霧よぎりに立ちし女をよ

演習えんじゆのひまにわざわざ

汽車くるまに乗りて

訪とひ来きし友とのめる酒さけかな

大川おほかはの水みづの面おもてを見るみることに

郁雨いくうよ

君のなやみを思ふ

智慧ちゑとその深き慈悲じひとを

もちあぐみ

為なすこともなく友は遊べり

こころざし得えぬ人人の

あつまりて酒のむ場所が

我が家なりしかな

かなしめば高く笑ひき

酒をもて

悶もんを解げすといふ年上の友

若くして

数人すにんの父となりし友

子なきがごとく酔よへばうたひき

さりげなき高き笑ひが

酒とともに

我が腸はらわたに沁みにけらしな

あくびあくびか  
呻うめみ

夜汽車の窓に別れたる

別れが今は物もの足らぬかな

雨に濡れし夜汽車の窓に

映うつりたる

山間やまあひの町のともしびの色

雨つよく降る夜の汽車の  
たえまなく雫流るる  
まどガラス  
窓硝子かな

真夜中の  
くちあんえき  
俱知安駅に下りゆきし  
女の鬢びんの古き痕きずあと

さつぽろ  
札幌に

かの秋われの持てゆきし  
しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街なみき櫺なみきにポプラに  
秋の風

吹くがかなしと日記に残れり

しんとして幅広き街の

秋の夜の

玉蜀黍の焼くるにほひよ

わが宿の姉と妹のいさかひに

初夜過ぎゆきし

札幌の雨

石狩の美国といへる停車場の

柵に乾してありし

赤き布片かな

かなしきは小樽の町よ

歌ふことなき人人の  
声の荒さよ

泣くがごと首ふるはせて  
手の相を見せよといひし  
易者もありき

いささかの銭借りてゆきし

わが友の  
後姿の肩の雪かな

世わたりの拙きことを

ひそかにも

誇りとしたる我にやはあらぬ

汝が瘦せしからだはすべて  
謀叛気のかたまりなりと  
いはれてしこと

かの年のかの新聞の  
初雪の記事を書きしは  
我なりしかな

椅子をもて我を撃たむと身構へし  
かの友の酔ひも  
今は醒めつらむ

負けたるも我にてありき  
あらしひの因も我なりしと  
今は思へり

殴らむといふになぐ

殴れとつめよせし

昔の我のいとほしきかな

汝三度なれみたび

この咽喉のどに剣けんを擬ぎしたりと  
 被告かれこくべつ別の辞じに言へりけり

あらそひて

いたく憎にくみて別れたる

友をなつかしく思ふ日も来きぬ

あはれかの眉まゆの秀ひいでし少年よ

弟と呼べば

はつかに笑みしが

わが妻に着物縫はせし友ありし

冬早く来る

植民地かな

平手もて

吹雪にぬれし顔を拭く

友共産を主義とせりけり

酒のめば鬼のごとくに青かりし

大いなる顔よ

かなしき顔よ

樺太に入りて

新しき宗教を創めむといふ  
 友なりしかな

治をさまれる世の事無ことなさに  
 飽あきたりといひし頃こそ  
 かなしかりけれ

共同の薬屋開き  
 儲まうけむといふ友なりき  
 詐欺さぎせしといふ

あをじろき頬ほほに涙を光らせて  
 死をば語りき  
 若あきびとき商人

子を<sup>お</sup>負ひて

雪の吹き入る停車場に

われ見送りし妻の眉<sup>まゆ</sup>かな

敵として憎みし友と

やや長く手をば握<sup>にぎ</sup>りき

わかれといふに

ゆるぎ出<sup>い</sup>づる汽車の窓より

人先<sup>ひとせき</sup>に顔を引きしも

負<sup>ま</sup>けざらむため

みぞれ降る

石<sup>いし</sup>狩<sup>かり</sup>の野の汽車に読みし

ツルゲエネフの物語かな

わが去れる後の樽のちうはさを  
おもひやる旅出たびではかなし  
死しににゆくごと

わかれ来きてふと瞬またたけば

ゆくりなく

つめたきものの頬をつたへり

忘れ来きし煙草たばこを思ふ

ゆけどゆけど

山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅あかく雪ゆきに流れて  
入日影いりひかげ

曠野の汽車の窓を照せり

腹すこし痛み出でしを

しのびつつ

長路の汽車にのむ煙草かな

乗合の砲兵士官の

劍の鞘

がちやりと鳴るに思ひやぶれき

名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の

宿屋安けし

我が家のごと

伴なりしかの代議士の

口あける青き寐顔ねがほを  
かなしと思ひき

今夜こそ思ふ存ぞんぶん分ぶん泣ないてみむと  
泊とまりし宿屋の  
茶のぬるさかな

水蒸気

列車の窓に花のごと凍こてしを染そむる  
あかつきの色

ごおと鳴る床こがらしのあと  
乾かわきたる雪舞ゆきひ立ちて  
林はやしを包つつめり

空知川雪に埋れて  
そらがは うも

鳥も見えず

岸辺の林に人ひとりゐき  
きしべ

寂莫を敵とし友とし  
せきばく

雪のなかに

長き一生を送る人もあり

いたく汽車に疲れて猶も  
なほ

きれぎれに思ふは

我のいとしさなりき

うたふごと駅の名呼びし

柔和なる  
にうわ

若き駅夫の眼をも忘れず  
えきふ

雪のなか

処しよしよに屋根見えて

煙えんとつ突けむりの煙うすくも空にまよへり

遠くより

笛ふえながながとひびかせて

汽車今とある森林いに入る

何事も思ふことなく

日ひいちにち  
日

汽車のひびきに心まかせぬ

さいはての駅おに下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

しらしらと氷かがやき

千鳥なく

釧路くしろの海の冬の月かな

こほりたるインクのびんを

火にかぎ翳し

涙ながれぬともしびのもと下

顔とこゑ

それのみ昔に変わらざる友にも会ひき

国の果はてにて

あはれかの国のはてにて

酒のみき

かなしみの滓をりを啜すするごとくに

酒のめば悲しみ一時に湧わき来るを  
寐ねて夢みぬを

うれしとはせし

出だしぬけの女の笑ひ

身に沁しみき

厨くりやに酒の凍こほる真夜中

わが酔よひに心いためて

うたはざる女ありしが

いかなれるや

小奴こやつこといひし女の

やはらかき

耳みみたほ朶なども忘れがたかり

よりそひて

深夜しんやの雪の中に立つ

女の右手めてのあたたかさかな

死にたくはないかと言へば

これ見よと

咽喉のんどの痕きずを見せし女かな

芸事げいごとも顔も

かれより優すぐれたる

女あしざまに我を言へりとか

舞<sup>ま</sup>へといへば立ちて舞<sup>ま</sup>ひにき

おのづから

悪<sup>あく</sup>酒<sup>しゆ</sup>の酔<sup>よ</sup>ひにたふるるまでも

死ぬばかり我が酔<sup>よ</sup>ふをまちて

いろいろの

かなしきことを囁<sup>ささや</sup>きし人

いかにせしと言へば

あをじろき酔<sup>よ</sup>ひぎめの

面<sup>おもて</sup>に強<sup>し</sup>ひて笑<sup>ゑ</sup>みをつくりき

かなしきは

かの白<sup>しら</sup>玉<sup>たま</sup>のごとくなる腕<sup>うで</sup>に残<sup>のこ</sup>せし

キスの痕あとかな

酔よひてわがうつむく時も

水ほしと眼めひらく時も

呼びし名なりけり

火をしたふ虫のごとくに

ともしびの明るき家いえに

かよひ慣なれにき

きしきしと寒さに踏めば板い軋きむ

かへりの廊下の

不意のくちづけ

その膝ひざに枕まくらしつつも

我がこころ

思ひしはみな我のことなり

さらさらと氷の屑くづが

波に鳴る

磯の月夜のゆきかへりかな

死にしとかこのごろ聞きぬ

恋がたき

才さいあまりある男なりしが

十年ととせまへに作りしといふ漢からうた詩を

酔よへば唱となへき

旅おに老いし友

吸ふごとに

鼻がぴたりと凍りつく

寒き空気を吸ひたくなりぬ

波もなき二月の湾に

白塗の

外国船が低く浮かべり

三味線の絃のきれしを

火事のごと騒ぐ子ありき

大雪の夜に

神のごと

遠く姿をあらはせる

阿寒の山の雪のあけぼの

郷里くににゐて

身投げせしことありといふ

女の三味さみにうたへるゆふべ

葡萄色えびいろの

古き手帳ていさにのこりたる

かの会あひびき合ごの時ときと処ところかな

よごれたる足袋たびは穿はく時の

気味きみわるき思おもひに似にたる

思おも出ひでもあり

わが室へやに女泣なみきしを

小説せうせつのなかの事ことかと

おもひ出づる日

浪淘沙  
らうたうさ

ながくも声をふるはせて

うたふがごとき旅なりしかな

二

いつなりけむ

夢にふと聴きてうれしかりし

その声もあはれ長く聴かざり

頬の寒き  
ほ

流離の旅の人として  
りうり

路問ふほどのこと言ひしのみ  
みちと

さりげなく言ひし言葉は  
さりげなく君も聴きつらむ  
それだけのこと

ひややかに清き大理石なめいしに  
春の日の静かに照るは  
かかる思ひならむ

世の中の明るさのみを吸ふくごととき  
黒き瞳ひとみの  
今も目にあり

かの時に言ひそびれたる  
大切の言葉は今も

胸にのこれど

真<sup>ましろ</sup>白なるラムプの笠<sup>かさ</sup>の

瑕<sup>きず</sup>のごと

流離の記憶消しがたきかな

函<sup>はこだて</sup>館のかの焼<sup>やけ</sup>跡<sup>あと</sup>を去りし夜<sup>よ</sup>の

こころ残りを

今も残しつ

人<sup>ひと</sup>がいふ

鬢<sup>びん</sup>のほつれのめでたさを

物書く時の君に見たりし

馬<sup>ば</sup>鈴<sup>れい</sup>薯<sup>しよ</sup>の花咲く頃と

なれりけり

君もこの花を好きたまふらむ

山の子の

山を思ふがごとくにも

かなしき時は君を思へり

忘れをれば

ひよつとした事が思ひ出の種たねにまたなる

忘れかねつも

病やむと聞き

癒いえしと聞きて

四しひやくり百里のこなたに我はうつつなかりし

君に似し姿を街まちに見る時の  
こころ躍をどりを  
あはれと思へ

かの声を最もい一度聴ちどきかば  
すつきりと  
胸はや霽はれむと今朝けさも思へる

いそがしき生活くらしのなかの  
時とき折おりのこの物おもひ  
誰たれのためぞも

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出いでなむ

死ぬまでに一度会はむと

言ひやらば

君もかすかにうなづくらむか

時として

君を思へば

安かりし心にはかに騒ぐかなしき

わか来<sup>き</sup>て年<sup>とし</sup>を重ねて

年<sup>とし</sup>ごとに恋しくなれる

君にしあるかな

いしかり  
石狩<sup>みやこ</sup>の都の外の

君が家

林檎りんごの花の散りてやあらむ

長ながき文ふみ

三年みとせのうちみたびに三度来ぬ

我の書きしは四度よたびにかあらむ

## 手套を脱ぐ時

手て套ぶくろを脱ぬぐ手てふと休やむ

何やらむ

こころかすめし思ひ出のあり

いつしかに

情じやうをいつはること知りぬ

髭ひげを立てしもその頃なりけむ

朝の湯の

湯槽ゆぶねのふちにうなじ載のせ

ゆるく息いきする物思いひかな

夏く来れば

うがひ薬の

病やまひある齒しに沁しむ朝のうれしかりけり

つくづくと手をながめつつ

おもひ出いでぬ

キスが上じやうず手の女になりしが

さびしきは

色にしたしまぬ目のゆゑと

赤き花など買はせけるかな

新しき本を買ひ来て読む夜半よはの

そのたのしさも

長くわすれぬ

旅たび七日なの

かへり来きぬれば

わが窓の赤きインクの染しみもなつかし

古文書こもんじよのなかに見いでし

よごれたる

吸取紙すひとりがみをなつかしむかな

手にためし雪の融とくるが

こちよく

わが寐飽きたる心には沁む

薄れゆく障子の日影

そを見つつ

こころいつしか暗くなりゆく

ひやひやと

夜は葉の香のほふ

医者が住みたるあとの家かな

まどガラス  
窓硝子

塵と雨とに曇りたる窓硝子にも

かなしみはあり

むとせ  
六年ほど日毎日毎にかぶりたる  
古き帽子も  
棄てられぬかな

こころよく

春のねむりをむさぼれる

目にやはらかき庭の草かな

あかれんぐわ  
赤煉瓦遠くつづける高堀の  
むらさきに見えて

春の日ながし

春の雪

銀座の裏の三階の煉瓦造に  
やはらかに降る

よごれたる煉瓦の壁に  
降りて融け降りては融くる  
春の雪かな

目を病める

若き女の倚りかかる

窓にしめやかに春の雨降る

あたらしき木のかをりなど

ただよへる

新開町の春の静けさ

春の街

見よげに書ける女名の

門札<sup>かどふだ</sup>などを読みありくかな

そことなく

蜜柑<sup>みかん</sup>の皮の焼くるごときにはひ残りて  
夕<sup>ゆふべ</sup>となりぬ

にぎはしき若き女の集<sup>あつまり</sup>会の

こゑ聴<sup>き</sup>き倦<sup>う</sup>みて

さびしくなりたり

何処<sup>どこ</sup>やらに

若き女の死ぬごとき悩<sup>なや</sup>ましきあり

春<sup>みぞれ</sup>の霽<sup>あ</sup>降<sup>り</sup>る

コニヤツクの酔<sup>よ</sup>ひのあととなる

やはらかき

このかなしみのすずろなるかな

白き皿さら

拭ふきては棚たなに重かさねゐる

酒場の隅すみのかなしき女

乾おほちきたる冬の大路おほちの

何処いづくやらむ

石炭酸せきたんさんのにはひひそめり

赤あかあかと入日いりひうつれる

河ばたの酒場の窓の

白き顔かな

新しきサラダの皿さらの

酢すのかをり

こころに沁しみてかなしき夕ゆふべ

空そらいろ色の礮びんより

山羊やぎの乳をつぐ

手のふるひなどいとしかりけり

すがた見の

息いきのくもりに消されたる

酔よひうるみの眸まみのかなしさ

ひとしきり静かになれる

ゆふぐれの

厨くりやにのこるハムのにほひかな

ひややかに鑷びんのならべる棚たなの前  
齒はせせる女を  
かなしとも見き

やや長きキスを交かはして別わかれ来きし  
深夜の街の  
遠き火事かな

病院の窓のゆふべの  
ほしろの白しろき顔かほにありたる  
淡あはき見覚みおぼえ

何時いつなりしか  
かの大川おほかはの遊船いうせんに

舞<sup>ま</sup>ひし女をおもひ出<sup>で</sup>にけり

用もなき文<sup>ふみ</sup>など長く書きさして

ふと人こひし

街<sup>で</sup>に出てゆく

しめらへる煙草<sup>たばこ</sup>を吸へば

おほよその

わが思ふことも軽<sup>かろ</sup>くしめれり

するどくも

夏<sup>きた</sup>の来るを感じつつ

雨<sup>うご</sup>後の小庭<sup>こには</sup>の土<sup>か</sup>の香<sup>か</sup>を嗅<sup>か</sup>ぐ

すずしげに飾<sup>かざ</sup>り立てたる

硝子屋ガラスヤの前にながめし

夏の夜の月

君来るといふに夙とく起き

白シャツの

袖そでのよごれを気にする日かな

おちつかぬ我が弟の

ここごろの

眼のうるみなどかなしかりけり

どこやらに杭くひ打つ音し

大桶おほをけをころがす音し

雪ふりいでぬ

ひとけ  
人気なき夜の事務室に

けたたましく

電話の鈴の鳴りて止みたり

目さまして

ややありて耳に入り来る

真夜中すぎの話声かな

見てをれば時計とまれり

吸はるるごと

心はまたもさびしきに行く

あさあさ  
朝朝の

うがひの料の水薬の

びん  
罎がつめたき秋となりにけり

夷なだらかに麦の青める

丘の根の

小径こみちに赤き小櫛をぐしひろへり

裏山すざぶの杉生のなかに

斑まだらなる日影ひかげ這はいひ入る

秋のひるすぎ

港町

とろろと鳴きて輪を描くとび鳶あつを圧せる

潮しほぐもりかな

小春日こはるびの曇硝子くもりガラスにうつりたる

鳥影とりかげを見て

すずろに思ふ

ひとならび泳げるごとき

家<sup>いへいへ</sup>の高<sup>たかひく</sup>低<sup>のき</sup>の軒<sup>のき</sup>に

冬の日の舞ふ

京橋<sup>たきやまちやう</sup>の滝<sup>たき</sup>山<sup>やま</sup>町<sup>ちやう</sup>の

新聞社

灯<sup>ひ</sup>ともる頃のいそがしさかな

よく怒<sup>いか</sup>る人にてありしわが父の

日<sup>ひ</sup>ごろ怒<sup>いか</sup>らず

怒れと思ふ

あさ風が電車のなかに吹き入れし

柳やなぎのひと葉

手にとりて見る

ゆゑもなく海が見たくて

海に来ぬ

こころ傷いたみてたへがたき日に

たひらなる海につかれて

そむけたる

目をかきみだす赤あかき帯おびかな

今日逢あひし町の女の

どれもこれも

恋にやぶれて帰るかへるとき日

汽車の旅

とある野中の停車場の

夏草の香のなつかしかりき

朝まだき

やつと間に合ひし初秋の旅出の汽車の  
堅き<sup>かた</sup>麵<sup>ぼん</sup>麩<sup>ぼん</sup>かな

かの旅の夜汽車の窓に

おもひたる

我がゆくすゑのかなしかりしかな

ふと見れば

とある林の停車場の時計とまれり

雨の夜の汽車

わかれ来てき  
 燈火あかりをくら小暗くらき夜の汽車の窓に弄もてあそぶ  
 青りんごき林檎ごよ

いつも来るく

この酒さかみせ肆せのかなしさよ

ゆふ日あかあか赤あかと酒いに射さし入いる

白はすぬまき蓮ぬま沼まに咲くごとく

かなしみが

酔ゑひのあひだにはつきりと浮うく

壁かべごしに

若わかき女の泣なみくをきく

旅の宿屋の秋の蚊帳かやかな

取りいでし去年こぞの袷あはせの

なつかしきにほひ身に沁しむ

初秋はつあきの朝

気にしたる左の膝ひざの痛みなど

いつか癒なほりて

秋の風吹く

売り売りて

手垢てあかきたなきドイツ語の辞書のみ残る

夏の末かな

ゆゑもなく憎にくみし友と

いつしかに親しくなりて  
秋の暮れゆく

あかがみ  
赤紙の表紙手擦れし

こくきん  
国禁の

ふみ かうり  
書を行李の底にさがす日

売ることを差し止められし

本の著者に

みち  
路にて会へる秋の朝かな

今日よりは

我も酒など呷らむと思へる日より

秋の風吹く

大海だいかいの

その片隅かたすみにつらなれる島島しましまの上に  
秋の風吹く

うるみたる目と

目の下の黒子ほくろのみ

いつも目につく友の妻かな

いつ見ても

毛糸の玉をころがして

鞆くつしたあを編む女なりしが

葡萄色えびいろの

長椅子ながいすの上に眠りたる猫ほの白しろき

秋のゆふぐれ

ほそぼそと

其<sup>そこ</sup>処<sup>ここ</sup>ら此<sup>ここ</sup>処<sup>ここ</sup>らに虫の鳴く

昼の野に来て読む手紙かな

夜<sup>よる</sup>おそく戸を繰<sup>く</sup>りをれば

白きもの庭を走れり

犬にやあらむ

夜の二時の窓の硝子<sup>ガラス</sup>を

うす紅<sup>あか</sup>く

染めて音なき火事の色かな

あはれなる恋かなと

ひとり呟<sup>つぶや</sup>きて

夜半よはの火桶ひをけに炭添すみそへにけり

真白ましろなるランプの笠かさに

手をあてて

寒き夜にする物思ひかな

水のごと

身体からだをひたすかなしみに  
葱ねぎの香かなどのまじれる夕ゆふべ

時ありて

猫のまねなどして笑ふ  
三十路みそぢの友のひとり住ずみかな

気弱きよわなる斥候せきこうのごとく

おそれつつ

深夜の街を一人散歩す

皮膚ひふがみな耳にてありき

しんとして眠れる街まちの

重き靴音

夜よるおそく停車場に入り

立ち坐すわり

やがて出いでゆきぬ帽ぼうなき男

気がつけば

しつとりと夜霧下おりて居をり

ながくも街をさまよへるかな

若しあ**ら**ば**煙草**恵めと

寄りて来**く**

あとなし人**びと**と深夜に語る

曠野**あらの**より帰るごとくに

帰り来**き**ぬ

東京の夜**よ**をひとりあゆみて

銀行の窓の下なる

舗**しきいし**石の霜**しも**にこぼれし

青インクかな

ちよんちよんと

とある小藪**こやぶ**に頬**ほほ**白**しろ**の遊ぶを眺む

雪の野**や**の路**みち**

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸ひそめし赤坊のあり

十月の産病院の

しめりたる

長き廊下のゆきかへりかな

むらさきの袖垂れて

空を見上げゐる支那人ありき

公園の午後

孩児の手ぎはりのごとき

思ひあり

公園に来てひとり歩めば

ひさしぶりに公園に来て

友に会ひ

堅く手握り口疾に語る

公園の木の間に

小鳥あそべるを

ながめてしばし憩ひけるかな

晴れし日の公園に来て

あゆみつつ

わがこのごろの衰へを知る

思出のかのキスかとも

おどろきぬ

プラタヌの葉の散りて触れしを

公園の隅すみのベンチに

二度ばかり見かけし男

このごろ見えず

公園のかなしみよ

君の嫁とつぎてより

すでに七月ななつき来しこともなし

公園のとある木蔭こかげの捨椅子すていすに

思ひあまりて

身をば寄せたる

忘れぬ顔なりしかな

今日街まちに

捕吏ほりにひかれて笑あはめる男は

マチ擦すれば

二尺ばかりの明るさの

中をよぎれる白き蛾がのあり

目をとちて

口笛かすかに吹きてみぬ

寐ねられぬ夜の窓にもたれて

わが友は

今日も母なき子を負ひて

かの城しろ址あとにさまよへるかな

夜<sup>よる</sup>おそく

つとめ先よりかへり来<sup>き</sup>て

今死にしてふ児<sup>こ</sup>を抱<sup>だ</sup>けるかな

ふたみ  
二二三こゑ

いまはのきはに微<sup>かす</sup>かにも泣きしといふに

なみだ誘<sup>さそ</sup>はる

真<sup>まし</sup>白<sup>しろ</sup>なる大根の根の肥<sup>こ</sup>ゆる頃

うまれて

やがて死にし児<sup>こ</sup>のあり

おそ秋の空気を

さんじやくしはう  
三尺四方ばかり

吸ひてわが児の死にゆきしかな

死にし児の

胸に注射の針を刺す

医者の手もとにあつまる心

底知れぬ謎なぞにむかひてあるごとし

死しじ児のひたひに

またも手をやる

かなしみのつよくいたらぬ

さびしさよ

わが児のからだ冷ひえてゆけども

かなしくも

夜<sup>よ</sup>明<sup>あ</sup>くるまでは残りぬ  
息<sup>いき</sup>ぎれし児の肌<sup>はだ</sup>のぬくもり



## 青空文庫情報

底本：「日本文学全集」2 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和42）年9月12日初版発行

1972（昭和47）年9月10日9版発行

底本の親本：「一握の砂」東雲堂書店

1910（明治43）年12月1日刊行

※冒頭の献辞と自序は、「啄木全集 第一巻」筑摩書房、1970（昭和45）年5月20日初版  
第4刷発行から、補いました。

※底本巻末の小田切進による注解は省略しました。

入力：j.jutyama

校正：浜野智

1998年8月11日公開

2017年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一握の砂

石川啄木

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>